

中国古代・中世における和蕃公主の降嫁をめぐって

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、中国王朝による周辺諸国に対する和蕃公主（皇女）の降嫁について、漢～唐間の事例を中心としながら詳細に論じたものである。従来、該分野の研究は唐代のそれについてのみ行われてきたといえるが、本論文は、その考察対象をその前後の時代に広げ、春秋戦国～宋元時代に及ぶ中国古代・中世の全時代を通じて、それがどのような歴史的意義を有する施策であったかを解明しようとしたもので、その所期の目的をほぼ達成したものと見える。

所謂東アジア世界論によれば、その世界は漢字、律令、儒教、仏教の共通要素を通じて形成されるものである。しかし、その論は、漢字、律令などの圏外にあった北アジアやチベットなどの西方世界を論じる際、大きな弱点をもっていた。本論文はそうした観点を止揚し、新たな視座を提供したものと見える。

本論文で、新たに指摘された点は以下のようなものである。

- ① 秦漢帝国の形成とともに確立した華夷観（中国を中華とし、外部を夷狄とする考え方）により、和蕃公主の降嫁は匈奴を懐柔するためにやむを得ず行われた、いわば屈辱的ともいうべき施策とみなされ、のちに、前漢の国威向上に伴ってその実施が避けられるようになる。続く後漢魏晉南北朝の漢民族王朝へ至っても、周辺勢力を増長せしめる「無益」な施策であるとみなされ、その実施は見出せなくなる。
- ② 一方、西晋の崩壊を受けた五胡十六国時代の諸朝（ほとんどが非漢民族によって建国された）においては、諸勢力間での政略婚が行われ、それは拓跋部・北魏（五胡の一である鮮卑拓跋部が建国した王朝）へと受け継がれたが、北魏の初代皇帝である道武帝（拓跋珪）は前漢の初代皇帝である高帝（劉邦）が匈奴に対して行った和蕃公主の降嫁を「良策」であるとして採用し、それがあたかも漢に発したものであるかの如きよみかえを行った。
- ③ その後、和蕃公主の降嫁には、北魏による華北の統一、及び非漢族王朝であるにもかかわらず、北魏を中華と見なす思想の形成に伴い、周辺勢力による中原王朝への求婚を受けて許可されるという、恩寵的性格が新たに加えられるようになる。
- ④ 北魏の分裂以降、一時的に政略婚への回帰現象が起こるものの、隋唐時代に至ると、再び統一王朝の勢威を背景に中国皇帝から周辺諸国へ恵み与えられる恩寵として和蕃公主の降嫁を許す、という構図が復活・確立した。
- ⑤ しかし、安史の乱以降になると、漢六朝期の漢民族王朝と同様、和蕃公主の降嫁に対して否定的状況が再び出現し、五代・宋に至る。
- ⑥ そこには唐中期から進行した唐王朝の「南朝化」（唐王朝がもっていた北方的要素が減衰し、漢民族・王朝がもっていた文化、政治体制などが徐々に社会の全体に及んでいった現象）と連動するところがあった。

以上、本論文は、従来全く指摘されなかったことがらを解明し、従来の所謂東アジア世界論研究を大きく進展させたものとして高く評価できる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。